【論　説】

蟷螂の斧
―― 古代ギリシア都市国家の民主化とペルシア戦争（中）――

的射場　敬　一

目　次

はじめに
1. アテナイの発展と民主化
1. 1.　重装歩兵と密集方陣の戦いの登場
1. 2.　ソロンの改革
1. 3.　ペイシストラトスの僭主政
2. イオニアとオリエント世界
2. 1.　イオニア植民都市ミレトスとミレトス学派（以上，前号）
2. 2.　イオニア植民都市とリュディア王国（以下，本号）
2. 3.　ペルシアの勃興とイオニア諸国
3. アテナイ・デモクラシーの成立とペルシア戦争
3. 1.　クレイステネスの改革
3. 2.　イオニアの反乱

2. イオニアとオリエント世界

2. 2. イオニア植民都市とリュディア王国

イオニア植民都市の隣国は，小アジアの内陸にあったリュディア王国という大国であった。そのリュディア王国とイオニアの植民都市とは，リュディア王国の国王にクロイソスが即位するまで即かず離れずの関係を続けていた。クロイソス王によって，小アジアのイオニア植民都市はリュディア王国の属国になるのであるが，それまでは，ギリシア本土のポリスと同様に自生的な発展を遂げていた。

リュディア王国の国王にクロイソスが即くまでのギリシアとオリエント世界の歴史を簡単に紹介しておきたい。ギリシア各地に並び立っていたミケーネ文明の諸国は，前1200年頃に次々とカタストロフに襲われて滅亡する。同じ頃，オリエント世界を支配していたヒッタイト帝国やエジプト新王国などの東地中海の列強諸国も滅亡[1]した。先史古代文明崩壊後の約400年が，歴史的記録がほとんどない，いわゆるギリシアの「暗黒」時代である。その暗黒時代の400年を経て，紀元前8世紀頃にギリシア世界の各地でポリスが出現する。それは，クレーロスという持分地を持った自由農民を中心とした水平的な結合の社会であった。ポリスの形成を促したのは，ギリシア世界の「慢性的な戦争状態[2]」であるとウェーバーは指摘しているが，幸いなことに，生まれたばかりのギリシアのポリスは強力な外部勢力の脅威にさらされることはなく，それゆえ，ギリシアのポリスは切磋琢磨して，それぞれの社会を自由に発展させることが出来ていたのである。

ギリシア世界でポリスが成立した頃，オリエント世界では北メソポタミア（現在のイラク）にアッシリアが勃興した。前8世紀末のサルゴン2世の頃にはメソポタミア全域を支配し，前7世紀中ごろアッシュール＝バニパル王の時代には，エジプトを含む全オリエントを征服し，最初の世界帝国となった。しかしその支配は，ギリシア本土やイオニアの植民都市にまで及ぶことはなかった。つまり，アッシリア帝国は，その関心をギリシア本土や小アジアのギリシア人植民都市に対して向けることなかった。キトーは，このことを次のように述べている。

> この活気のある，知的ギリシア人は，数世紀間，大帝国という不活発な集団に吸収される代わりに，自分の才能によく合った，自分の才能を発展させた，外見的には不合理な組織の下に生きることが許されたのである[3]。（キトー『ギリシア人』）

アッシリア帝国の支配下で，いち早く成立したのが，メディア王国である。インド＝ヨーロッパ語族のメディア人が前715年にイラン高原の北部，カス

ピ海沿岸のメディア地方に建国したものである。次いで前670年頃に小アジア，現在のトルコのアナトリア半島にリュディア王国が成立した。ほぼ同じ頃の前663年にエジプトが復活した。そして一番遅かったのが，セム系遊牧民のカルディア人がメソポタミア地方に前625年に建国した新バビロニアである。成立したばかりの新バビロニアとメディアの連合軍は，前612年，アッシリア帝国を攻めて首都ニネヴェを占領し，ついにアッシリア帝国を滅ぼした。

アッシリア帝国の滅亡は，その後の，オリエント世界とギリシア世界の激動を予感させるようなものであった。オリエント世界は，エジプト王国，メソポタミア地方を治めた新バビロニア王国，イラン高原のメディア王国，そして小アジアを統治していたリュディア王国の四王国分立時代(4)になる。この四王国の分立抗争の時代は，アッシリア帝国を滅ぼした紀元前612年から，イラン高原のメディナ王国が，その臣下であったアケメネス朝ペルシアに滅ぼされる紀元前550年までの，およそ60年間である。

この四王国対立の時代，イオニアのギリシアの植民都市は，隣国リュディア王国と即かず離れずの関係で交易と交流を続けていた。イオニア自然哲学のミレトス学派の面々が活躍していたまさにその頃，リュディア王国の王位にクロイソスが即いた(5)。紀元前560年である。クロイソスの登場によって，イオニア世界の平穏は破られることになる。ヘロドトスは，その様子を次のように述べている。

> アリュアッテスの死後，その子クロイソスが35歳で王位を継いだ。クロイソスが攻撃の戈を向けた最初の都市はエペソスである。この時クロイソスによって包囲攻撃をうけたエペソス人は，アルテミスの神殿から城壁まで縄を張って，町全体をアルテミス女神に奉納したということにした。当時攻囲されていた旧城下と神殿との距離は7スタディオンあった。クロイソスはエペソスに先ず手を染めたのであったが，ついでイオニア，アイオリス人の全都市にさまざまな言いがかりをつけて攻撃した(6)。（ヘロドトス『歴史』巻1の26）

クロイソスはイオニアの植民都市だけでなく，アナトリア西岸一帯に対して，戦争を仕掛け，その支配下においていく。

> クロイソスはリュディア人で，アリュアッテスの子として生まれ，ハリュス河以西の諸民族を独裁的に統治していた。…このクロイソスが，われわれの知る限りでは，ギリシア人をあるいは征服して朝貢を強い，あるいはこれと友好関係を結んだ，最初の異邦人であった。すなわち彼は，イオニア人，アイオリス人およびアジアに住むドーリス人を征服する一方で，ラケダイモン（スパルタ）とは友好関係を結んだのである。クロイソスの統治以前は，すべてのギリシア人が自由であった。クロイソスより以前にも，キンメリア人がイオニアに侵攻したこともあったが，それも国々を征服するようなことではなく，単に掠奪を目的とする侵入にすぎなかったからである[(7)]。（ヘロドトス『歴史』巻1の6）

もともと小アジアのギリシア植民都市は近隣諸国と対立することが多かったし，なかでもリュディア王国には大いに悩まされていた。しかしながら，ヘロドトスも指摘しているように，イオニア世界に侵攻してきても「国々を征服するようなことではなく，単に掠奪を目的とする侵入にすぎなかった」のである。リュディア王国のクロイソスはこれとは全く違っていた。それまでは平和的な交流や交易の関係にあった小アジアのギリシア植民都市を征服し，その支配下においたのである。つまり，アナトリア西岸一帯のギリシア植民都市を征服し服属させ，宗主権を確立したギリシア植民都市に貢納義務を課したのである。ヘロドトスが言うように，「クロイソスの統治以前は，すべてのギリシア人が自由であった」が，その自由を，小アジアのギリシア人たちは失ったのである。つまり，完全な独立状態から半独立の状態におかれた。

しかし，その覇権も長くは続かなかった。メディア王国を滅ぼして台頭してきていたキュロス2世のペルシアが，リュディア王国に迫ってきていた[(8)]のである。

2. 3. ペルシアの勃興とイオニア諸国

リュディア王国のクロイソスが，小アジアのギリシア植民都市を服属させていた頃，イラン高原でも大変動が起きていた。メディア王国に服属していたアケメネス朝ペルシアのキュロス 2 世が，前 559 年に父のカンビュセス 1 世の死を受けて王位を継承する。キュロスは，紀元前 600 年頃，ペルシア王国の王である父カンビュセス 1 世と母マンダネ（メディア王アステュアゲスの娘）の間に生まれた。当時のペルシアはメディア王国に従属する小王国にすぎなかった。王都はアンシャンにあり，ペルシア国王はアンシャン王の称号も代々保持していた。アンシャンはエラムの故地でもあり，エラム語やエラムの諸制度を引き継いでいたものの，エラム王国自体は衰退して西部のスサ周辺のみを領有しているにすぎなかった。

キュロスは，即位してから 6 年後の前 553 年に宗主国のメディアに対して反乱を起こした。前 550 年には，メディアの将軍ハルパゴスと内通し，彼の助けを借りてメディアの首都エクバタナを攻略してメディア王アステュアゲスを打倒し，祖父の国であるメディアを滅ぼした。この時をもって，統一王朝としてのアケメネス朝が始まったとされる。キュロスは首都エクバタナを制圧するとメディア領土全域の制圧に乗り出し，イラン高原全体の覇権を確立した。四王国連立時代は，前 550 年にメディアが，アケメネス朝ペルシアに滅ぼされることで終焉した。ペルシアは，宗主国のメディア王国を滅ぼした後，残りのリュディア，新バビロニア，エジプトと順に滅ぼし，オリエント世界の覇権を握り，ペルシア帝国を建設する。アケメネス朝ペルシアは，前 330 年にマケドニア王国のアレクサンドロス大王の東方遠征の途上に滅ぼされるまでの 200 年余続いた。

さて，前節で述べたリュディア王国のクロイソスは前 595 年に生まれ，前 560 年，35 歳の若さで王位に即き，エーゲ海沿岸のギリシア人植民都市を征服し服属させていた。他方，アケメネス朝ペルシアのキュロスは，前 600 年頃の生まれということだからクロイソスよりも少し年が上であるが，クロイソスから遅れること 1 年後の前 559 年に王位に即いた。両雄並び立たずというが，クロイソスとキュロスもまさにそうであった。ヘロドトスによれば，リュディ

ア王国のクロイソスは，勃興するペルシアとの関係をどうするかについてデルフォイの神託を求めていた。神託は，「クロイソスがペルシアに出兵すれば，大帝国を亡ぼすことになろうといい，ギリシアの中で最強の国はいずれの国々であるかを調べ，これを同盟国とするよう勧告した[9]」のである。つまり，もしペルシアと戦えば「帝国」は滅びるだろうという神託について，滅びる「帝国」というのは，ペルシアのことだとクロイソスは解釈した。

前546年，アケメネス朝ペルシアのキュロスが，小アジアに攻め込んできた。迎え撃つクロイソスは，神託に従いスパルタをギリシア最強の国と信じ，同盟を組んだ。リュディア＝スパルタ連合軍はアナトリア半島中央部のハリュス川（現クズルウルマク川）に進軍した。クロイソスはさらにエジプト第26王朝のイアフメス2世，新バビロニアのナボニドゥスにも応援を求めた。これに対してアケメネス朝ペルシアのキュロスは，リュディア王国の属国であったイオニア植民都市の離反を謀り，イオニア各地に使者を送っている。キュロスの戦い方は，戦う前にあらかじめ敵方に降伏を勧めたり，敵方陣営を内部から切り崩し，寝返る者を増やし，その裏切り者や内通者の離反によって相手を撹乱し，労少なくして勝利するというものであった。ヘロドトスは次のように書いている。

> キュロスはしかし軍隊を動かす前に，イオニア各地に使者を送り，クロイソスから離反させようとした。しかしイオニア人はそれに従わず，かくてキュロスが到着し，クロイソスに対峙して陣地を構えるに及んで，両軍はこのプテリアの地区において，力と力の対決をすることになった。激しい戦闘となり，両軍とも多数の戦死者が出したが，結局勝敗決せず，日没とともにもの別れとなった[10]。（ヘロドトス『歴史』巻1の76）

イオニア諸国は，クロイソスへの忠誠心からペルシアの提案を拒絶したとは思えない。遠くの侵略者であるペルシアよりも古くからの関係があるリュディアの方がまだましという，おそらくはその程度の判断であったであったのではないだろうか。

プテリアでの戦いは勝負がつかないままに終わった。クロイソスは「交戦の際自軍がキュロス軍よりも遥かに劣勢であった」のと，「翌日キュロスが攻撃してこなかったので，サルディスへと引き上げた[11]」。冬に向かう季節になり，ペルシアも一旦は帰国し，戦いは翌年の春になるだろうとクロイソスは考えたのである。すでにエジプトや新バビロニアと同盟関係を結んでいたので，その援軍を頼み，軍事力を増強しての翌年の春の戦いに備えようとしていた。ペルシアもそうするだろうと勝手に判断した。それで，「ペルシア勢と交戦した麾下の部隊の内，外人傭兵はことごとく暇をやり解散してしまった。あのようなきわどい戦いの後に，キュロスがサルディスへ進攻してくるとは夢にもおもわなかったからである[12]」。

ところがクロイソスの想定に反してペルシアのキュロスは，そのままリュディアの首都サルディスを攻めた。なぜか。

> キュロスは，クロイソスがプテリアの戦いの後撤退してゆくとすぐ，クロイソスが撤収後に麾下の軍隊を解散するはずであることを知って思案の末，リュディアの戦力が再び結集されるに先立って，できるだけ早くサルディスへ出兵するのが得策であるという結論に達した。キュロスはこう思い定めると，これを実行に移すのも早かった[13]。（ヘロドトス『歴史』巻 1 の 79）

この判断の差が，両者の運命を分けた。攻めてきたペルシア軍と迎え撃つリュディア軍の戦力比では，クロイソスの言では，圧倒的にリュディア方が不利だった。だからこそ，来春の決戦に備えてエジプトやバビロニア，そして，スパルタに援軍を要請しているのである。ヘロドトスによれば，「当時アジアにおいては，勇気，戦力の点でリュディア人を凌ぐ民族は一つもなかった」のであり，だからこそ数的劣勢においてもペルシア軍との戦いで互角に戦えたのであろう。アケメネス朝ペルシアにとっては相手方の陣営に攻め込んでの戦いである以上，時間的猶予をおけばおくほど相手には有利になり，自分たちには不利になることは自明の理である。そうであれば，首都サルディスに引き上げた

リュディアが軍隊を解散したという情報を手に入れたキュロスが，クロイソスにとっては想定外の短期決戦でと首都サルディスに攻め上る決断するのは納得できることである。もちろんクロイソスの言にあるように「あのようなきわどい戦い」というのは，両者にとってギリギリの戦いである。そこで再び攻撃をしかけてくるというのは，リスクがある行為である。勝てるタイミングを慎重に見きわめ，そして決断したら迷わず大胆に行動するところにキュロスの勝機があった。

まさに想定外のキュロスの攻撃に面食らいながらも，勇敢なリュディア軍は14日間も持ちこたえたがついに陥落する。

> こうしてペルシア軍はサルディスを占領し，クロイソス王その人を捕虜にしたのであるが，クロイソスは在位14年，攻囲を受けること14日間，そして神託通り自分の大帝国に終止符を打ったのである[(14)]。（ヘロドトス『歴史』巻1の86）

ペルシアのキュロスの猛攻の前にサルディスは陥落，クロイソスは捕虜となった。ここにリュディア王国は消滅したのである。

ここで，イオニアの反乱（前499年）までのペルシア帝国の拡大について瞥見しておこう。

キュロス最後の遠征は，前538年の新バビロニアの征服・併合である。侵入したペルシア軍は，ナボニドスに反対するマルドゥク神殿の神官に迎えられて首都バビロンに入城し，新バビロニアを滅ぼした。古代エジプトを除く古代オリエント世界を統一して空前の大帝国を建設し，諸王の王と呼ばれた。その時，バビロンに捕囚されていたユダヤ人を解放している。前529年，71歳でなくなると，2代目のカンピセス2世（在位：前529年－525年）はエジプト王国の征服に着手した。エジプトがペルシアの手に落ちたその年，前525年にカンピセス2世は夭折している。たった4年間の在位だった。しかしながら，2代目のカンピセス2世の時代までにオリエント世界の四王国（メディア，リュディア，新バビロニア，エジプト）のすべてが，ペルシア帝国に征服されたのである。

ペルシア帝国の 3 代目の王ダレイオス 1 世（在位 : 前 522 年 – 前 486 年）は，カンビュセス 2 世の弟バルディヤと偽って王位を簒奪したマゴス祭司のガウマータを，6 人のペルシア貴族とともに襲って殺し，即位を宣言した。即位後，王位継承問題もからんで帝国各地に大規模な反乱が起こった。その反乱をわずか 1 年ほどで鎮圧して，自己の帝位を不動のものにした。ダレイオス 1 世の下で，東は北西インドのガンダーラ，西はマケドニアまでとその版図を拡大させ，彼の時代にペルシアは最大の版図になった。ダレイオス 1 世は「諸王の王」と称し，帝国行政組織の整備にも取り組み，全土を 20 余州に分け，サトラップ（総督）を任命して徴税や治安維持を行うとともに，中央から「王の目」「王の耳」と呼ばれる監察官を派遣して，州行政の監視や商業情報の収集に当たらせた。そのために「王の道」と呼ばれる国道を整備し，駅伝制を敷き，王都と地方を直結する体制がとられた。新都ペルセポリスを建設し，中央集権体制を強化した。王都と地方を結ぶネットワークは，東はインドとシルクロードにつながり，西は地中海とつながっていた。このような交通網の整備に加え，金貨・銀貨が発行され，商業交易の条件は有利になった。帝国内におけるアラム人，フェニキア人などの商人は交易活動の範囲を西地中海からインドにまで広げた。地中海では，ペルシア帝国の保護のもとで活動していたフェニキア商人に対して，ギリシアが激しく挑戦し始めた。それが，5 世紀に勃発したペルシア戦争の原因の一つとなるのである。

話をもとに戻そう。リュディア王国の属国であったイオニア植民都市は，ペルシアの王キュロスと和を講じていたミレトスを除いて，将軍ハルパゴスの巧妙な攻城戦の前に次々と破れ，ペルシアの支配に服することとなった[(15)]。ペルシア帝国は，イオニアの都市国家に対して宗主権を確立した。イオニアの植民都市は，ペルシア帝国に一定の貢租を納める従属国となったが，しかし，その独立は保っていた。つまり，イオニアの植民都市は，リュディア王国のように完全にペルシアに飲み込まれた訳ではなかった。ペルシアの支配もけっして苛酷なものではなく，貢租の額もリュディア時代と大差なく，苛斂誅求にはほど遠いものであった。兵役義務が新たに加わった可能性があるが，経済的には

繁栄が続いていた。特にミレトスは，前6世紀前半の内紛による疲弊から立ち直り，前6世紀後半にはペルシア支配下にあって，「イオニアの華[16]」に返り咲くのである。

ペルシアは征服したイオニアの諸都市国家に対して宥和政策をもってのぞんだ。外交権に関しては重大な制限を加えたであろうが，内政に関しては自治を建前とした。だが，基本的なところで実質上の内政干渉をおこなっていた。宗主権の安定を求めるペルシア王は，己に従順な，息のかかった腹心ともいうべきギリシア人を，ギリシア植民市の権力の座に据え，それによって効率よくイオニアその他を支配しようとしたのである。すなわち，ペルシア治下のイオニア世界は，広汎な僭主輩出を見ることになった。この僭主擁立政策が，ペルシア戦争の導火線となるイオニア反乱の主要な原因をなすものとなるのである[17]。

3. アテナイ・デモクラシーの成立とペルシア戦争

3. 1. クレイステネスの改革

イオニアのギリシア人植民都市が，ペルシアに征服されその宗主権の下に置かれていた時，アテナイもまた，僭主ペイシストラトスの支配下にあった。ペイシストラトス家の親子二代にわたる僭主政は，中断の時期をはさんで50年にも及んだ。その僭主政を打倒したのは，デルフォイの神託に従ったスパルタ王クレオメネス一世とそれに呼応したアテナイ民衆であった。前510年のことである。

アテナイでは，クレイステネスを中心とするアルクメオン家が反僭主活動の急先鋒だった。僭主政に反対して国外退去を余儀なくされていたクレイステネスはペイシストラトス家追放をスパルタに働きかけた。それは，デルフォイの神託を司る巫女を通してであったと言われている。デルフォイの神託を利用して僭主政打倒のためにスパルタを利用したのは，スパルタが当時とみに勢威を増し，反僭主活動の牙城の観さえあったからである。

ペイシストラトス家をアテナイから追放し僭主政を終焉させた後，アルクメ

オン家のクレイステネスと寡頭派のイサゴラスとの間で権力闘争が発生した。アルクメオン家のクレイステネスは穏和な中間派を支持母体とし，寡頭派のイサゴラスは地主貴族をその支持基盤としていた。アリストテレスの『アテナイ人の国制』によれば，次のようであった。

> (1) 僭主政治が仆れて後テイサンドロスの子で僭主らの友であったイサゴラスとアルクメイオン家の出であるクレイステネスとが互いの党争を続けた。徒党の点において劣ったクレイステネスは大衆に参政権を与えて民衆を自己に惹きつけた。(2) そこでイサゴラスは気勢揚がらず自分の賓客だったクレオメネスを再び招き，アルクメイオン家が涜神者の仲間と思われていたという理由で汚れを追いはらう説得した。(3) クレイステネスが逃げ出した後でクレオメネスは少数の人々を率いてアテナイ人の七百家族を涜神のゆえをもって追放した[18]。(アリストテレス『アテナイ人の国制』第 20 章)

この二つの党派の争いは，まず寡頭派のイサゴラスに軍配があがった。彼が前 508 年から 507 年のアルコンに任命されたのである。彼の政策は，ソロンやペイシストラトスの時代に市民権を得た人々，つまり，中下層市民の市民権を剥奪し，政治を少数の貴族の手に委ねる寡頭政治を実現しようとするものであった[19]。劣勢になったクレイステネスは，民衆を味方につけることで挽回を図った。だが，そもそもクレイステネスの出身母体であるアルクメオン家は，民衆派のペイシストラトスと争っていた穏健派の「海岸の人々」の党の領袖であり，クレイステネスその人も決して民衆派ではなかった。しかし，寡頭派のイサゴラスに対抗するために，クレイステネスは，「以前には歯牙にもかけなかった」民衆を，「この時になって完全に自派に引き入れることに成功[20]」した。つまり，クレイステネスは民衆の国制上の地位を強化する一連の法案を民会に提出し，彼らの圧倒的な支持を得て，これを通過させたのである。それは，イサゴラスが筆頭アルコンの年，すなわち前 508 年のことであった。これが『アテナイ人の国制』で「徒党の点において劣ったクレイステネスは大衆に参政権を与えて民衆を自己に惹きつけた[21]」と書いていることの内容である。これ

により形勢は逆転した。

窮地に陥ったイサゴラスは，「ペイシストラトス一族を攻撃した時以来，親密な間柄になっていたスパルタ[22]」の王クレオメネスに救援を求めた。イサゴラスの求めに応じたスパルタ王は，アテナイに対し，アルクメオン一族が「穢れ人[23]」であることを理由として，一族を国外に退去させるよう要求した。クレイステネスはすぐに国外に逃れた。それにもかかわらずスパルタ王は,「少数の手兵を携えてアテナイにきて，イサゴラスから通告されていたアテナイの700家族を，穢れたものとして放逐した」だけでなく，「評議会（ブーレ）を廃止しようと試み，イサゴラス派の300人に政権を委ねよう[24]」とした。つまり，スパルタの息のかかった寡頭政治をアテナイに樹立しようと企てたのである。

スパルタ王クレオメネスの「評議会（ブーレ）を廃止しようと試み，イサゴラス派の三百人に政権を委ねよう」とする企ては，明らかに行き過ぎであった[25]。評議会はその解散に抵抗し，これに呼応する形でアテナイの民衆が反旗を翻したのである。アテナイの内政に対するスパルタの軍事力をもってする露骨な介入は，アテナイ民衆の反感を買ったのである。アテナイ民衆にとっては，スパルタの内政干渉を受け入れることはすなわち，アテナイがスパルタに従属することを意味したのであろう。

アテナイの民衆に攻められたスパルタ軍とイサゴラスの一派はアクロポリスの丘に逃げ込んだ。「アテナイ人たちは結束し，彼らを二日間にわたって包囲攻撃した」が，「三日目には休戦が成立し，彼らのうちスパルタ人のみは国外に撤退した[26]」。そこで，アテナイの民衆は，「クレイステネス以下の亡命者を呼び返した」のである。

このアテナイの政変は，一見すると穏健派のアルクメオン家のクレイステネスと寡頭派のイサゴラスの戦いのように思えるが，実は，その主体は，アテナイ民衆であった。クレイステネスはすでに亡命していたのである。寡頭政を樹立しようとする寡頭派のイサゴラスとそれを支援するスパルタの王を追い詰めたのは，アテナイの民衆であった。アテナイ市民は，民主政を選んだのである。スパルタの王とスパルタ軍を国外退去させ，寡頭派のイサゴラスとその一派を

追放した後で，アテナイの民衆は亡命していたクレイステネスを呼び戻した。民主政樹立のための法案を民会に提出し，それを通過させたクレイステネスを，アテナイ市民は選んだのである。それゆえ，「国政が民衆の手に帰して以来，クレイテネスは民衆の領袖であり，また民衆の指導者[27]」となったのである。アテナイ市民は，貴族政の復古（寡頭政）でもなく，民衆の支持によって成立した僭主政という独裁でもなく，民衆（デーモス）自身が支配者となる，デモクラシーを選んだのである。

ブルクハルトは，ポリスという都市国家の形成は「住民の全生存における大きな，決定的体験」であり，「田畑の耕作を続けている所でも，農村的生活方式から圧倒的に都会的生活方式へと転換した」と述べている。そして，その意義は「それまでは「農場経営者」であった者が，誰もかれも一緒に生活することになると「政治家」に[28]」なることだと指摘しているが，このアテナイ民衆の蜂起は，彼らがまさしく「政治家」となったことを如実に示しているのではないだろうか。彼らは，自らと自らの共同体の運命を自身の手によって切り拓こうとしたのである。換言すれば，アテナイの民衆は，アルコンのイサゴラスと彼を支援するスパルタ王とその軍隊に抵抗することで，政治主体として自らを現し始めたのである。そして，それに制度的な形姿を与えたのが，民衆によって国外から召還されたクレイステネスであった。

古代ギリシアにおいて自由というのは，大きな価値をもっていた。自由は何よりも他者に隷属していないこと，そして，他の国に隷属していないことであった。アテナイ民衆は，その自由が，寡頭派のイサゴラスと彼を支援するスパルタによって脅かされていると感じたのである。そこは譲歩できないと感じたのである。スパルタのアテナイ内政への干渉に，アテナイの自由が脅かされていると感じたのであろう。だからこそ，アテナイの民衆は武器をとって蜂起したのである。アテナイ民衆の蜂起こそが，アテナイ・デモクラシーへと向かうもっとも決定的な転回点だったと言ってよいのではないだろうか。そして，この僭主政を打倒し，民主政を樹立したアテナイの試みは，ペルシアを宗主国としていだき，僭主政下にあったイオニア民衆の心に働きかけるものがあったに違い

ない。だからこそ，ペルシア帝国相手の無謀な反乱が，アナトリア半島やエーゲ海の島々のギリシア植民都市に燎原の火のように燃え広がることになるのであり，その鎮圧の長い年月がかかることにもなるのである。

クレイステネスの改革に戻ろう。寡頭派のイサゴラスと彼を支援していたスパルタ王を排除したアテナイの民衆は，国外に追放されていたクレイステネスを呼び戻す。帰国したクレイステネスは国制改革に着手する。まず貴族政の基盤となっていた従来の血縁にもとづく4部族制を廃止した。その代わりに地域的な行政単位をもとにして人工的に編成した10部族制を導入することによって，新しい体制の枠組みを確立した[29]。デーモス（区）は，市域・内陸・沿岸の3地域に分けられ，各地域はさらに10に細分され，それら3組から1部族を構成するという措置によって地域的対立を除去しようとした[30]。中心市と農村領域が一体化して1部族を構成したということは，それは，これまでのアテナイの中心市（貴族層）による農村領域（民衆層）の支配を構造的に打破し，市民団の一体性に基盤をおいた政治体制を創出しようとする[31]試みであった。

クレイステネスのこの改革は，ウェーバーによれば，在留外国人（メトオイコイ）や被解放民などの財産ある人々を新市民として「全面的に共同体に組み入れ，これによってあわせて国家の門閥的な編成を破壊しようとした」[32]ものであった。貴族政の根幹をなした「門閥団体を故意に寸断」し，まったく「新しい純粋に地域的な国家区分が施行」されたのである。すべての人は，そして都市在住者も，「みずからの地域的な区（デーモス）を持ち，このデーモスにすべての人は国法上，永続的かつ世襲的に所属」し，そこで，「民衆裁判権の招集ならびに陶片追放」[33]も行われたのである。つまり，彼の行った部族制の再編成は，ソロンによって着手され，ペイシストラトスによって壊されてきていた貴族政を土台から突き崩し，それに代わる民主政の土台を構築するものであったと言ってよいであろう。それゆえ，数世紀に及ぶ古代アテナイの歴史のなかで，このクレイステネス改革ほど「人々の生活に大きな変化をもたらしたものは，ほかに例がない」[34]と言われるのである。

クレイステネスによって，政治的装置もまさに民衆の政治参加を担保するも

のとして，つまり「政治的平等」としてのイソノミアを実現するものとして整備されていく。政治の最高意思決定機関として民会が整備される。アゴラやアレイオス・パゴスを見下ろすプニュックス（Pnyx）の丘に露天の民会場が造られたのは，クレイステネスの改革から 4 年後の前 504 年のことである。収容人数は，およそ 5000 人であった[35]。18 歳以上の成年男子市民が出席するこの定例会は，各プリュタネイア（1 年の 10 分の 1 の期間）に 4 回ずつ，最低でも年 40 回は開催された。

民会は，戦争や平和，条約，財政，立法，公共事業，つまり統治活動の全領域に最終的な決定権を持っていた。提出された議題の表決は，通常は一日の討議で行なわれ，原則として出席者全員が平等な発言権をもっていた。ヘロドトスは，アテナイが強大になったということからも，「演説の平等（isêgoria）ということが，単に一つの点のみならずあらゆる点において，いかに重要なものであるか」ということを力説している。アテナイがペイシストラトス家の僭主政下にあった時には,「近隣のどの国をも戦力で凌ぐことができなかった」のに,「独裁者から解放されるや, 断然他を圧して最強国となったからである」という。なぜか。それは，独裁者の下では，「故意に卑怯な振る舞いをしていた」のに,「自由になってからは，各人がそれぞれ自分自身のために働く意欲を燃や」[36]（ヘロドトス『歴史』巻 5 の 78）すからであるという。この民会での平等な発言権，すなわちイセゴリアは，ギリシアの著作家たちによって，しばしば「民主政」の同義語として用いられた[37]のである。

3. 2. イオニアの反乱

ペルシアに対する反乱は，前 399 年，ミレトスの僭主代理アリスタゴラスによって起こされた。ことの次第はヘロドトスによれば，こうである。

「ナクソスの資産階級の幾人かが，民衆派によって国を追われ，ミレトスに亡命してきた[38]」。「ミレトスへ亡命してきたナクソス人たちは，軍隊を貸してもらい，その力で祖国に帰りたいと思うが，なんとかならぬものかと，アリスタゴラスに頼んだ[39]」のである。つまり，ナクソス島で政変が起き，ミレ

トスに亡命してきた資産階級の人びとが，ミレトスの僭主代行のアリスタゴラスに祖国復帰のために「軍隊を貸して」ほしいと頼んだのである。この頼みに対してミレトスの僭主代行アリスタゴラスは，「もし自分の尽力でこの者たちを帰国させてやることができれば，ナクソスの支配権を握れるものと思案し[40]」，というのは，「ナクソスの富強は，他の島々にぬきんでており，同じ頃ミレトスも，ミレトス史上最盛の時期に達しており，イオニアの華と謳われ[41]」ていたのである。ナクソスは，「パロスやアンドロスなど，いわゆるキクラデスの他の島々[42]」をも服属させていたので，アリスタゴラスは，ナクソスの支配権を握れるだけでなく，キクラデス諸島に自分の海上覇権を広げる絶好の機会と捉えたのである。

そこで，アリスタゴラスは，ナクソス島からの亡命者に対して，次のように述べた。「ナクソスには 8000 の重装兵と，軍船多数がある[43]」富強の国であると聞いているし，それでも「帰国を強行する」には，「強力な軍隊」が必要である。ペルシア帝国のサルディスの総督アルタプレネスは，「ダレイオスの兄弟」つまり 3 代目のペルシア帝国の王，ダレイオス大王の兄弟であり，「アジアの沿海地方一帯を支配し，大軍隊と艦船多数を掌握[44]」している。彼とは懇意であるから頼んでみると提案したのである。

もともとリュディアの首都であったサルディスは，ペルシア帝国の小アジア支配の拠点となっていた。その総督が，ダレイオス大王の兄弟のアルタプレネスであった。ミレトスの僭主代理アリスタゴラスは，サルディスまで出かけてアルタプレネスにナクソス派兵要請をしたのである。ナクソスは，「あまり大きな島ではないが，美しく地味も肥え，かつイオニアにも近く，財宝や奴隷も豊かな国である」し，「ナクソスに従属しているパロスやアンドロスなど，いわゆるキクラデスの他の島々をも，大王の版図に加えること[45]」ができると説得したのである。

サルディスの総督アルタプレネスは，ペルシアの宮廷のあったスサへ使者を送り，アリスタゴラスの提案を報告しダレイオス大王の同意を得た。そこで，「200 の三段櫂船と，ペルシア軍および同盟国軍で編成した強大な軍勢を準備

し」,「総指揮官には，アカイメネス家の出であり，ダレイオスにも彼自身にも従兄弟にあたるメガバテスを任命し[46]」「その遠征軍をアリスタゴラスの許へ送った[47]」。ペルシア帝国の軍隊とそれに小アジアのギリシア人都市の軍隊との連合軍が，ナクソス島の征服に向かった。ナクソス側も「すぐに城外にある物資を城壁の内へ移し，籠城の覚悟を決めて食料と飲料を用意し，城壁の補修を行[48]」い,「戦争必至と見て準備を怠らなかった[49]」のである。守りを固めた都市国家に対する攻城戦の難しさを示す事例の一つであると思うが，結果は以下のようであった。

> 遠征軍が船隊をキオスからナクソスに進めたときには，すでに防備を整えた相手に立ち向かわねばならなかったわけで，かくて包囲戦は 4 ヶ月にわたって続いた。やがてペルシア軍の用意してきた軍資金は底をつき，これにくわえてアリスタゴラス個人の出費も多額に上り，包囲を続けるためには，さらに多額の戦費を必要とする事態になるに及んで，遂に遠征軍はナクソスの亡命者のために城壁を築いてやった上で，惨憺たる状態で大陸へ引き上げていった[50]。（ヘロドトス『歴史』巻 5 の 34）

ペルシア帝国は大国である。ペルシア帝国の大軍と小アジアのギリシア植民都市の軍隊が召集されて，ナクソスを攻めた。包囲して 4 ヶ月たっても落ちなかったのである。結局，攻めていた側が根負けして退却したのである。そもそもナクソス遠征は，ナクソスの亡命者の頼みを口実にミレトスの僭主代行アリスタゴラスの野心から発したものである。野心というのは，ナクソス及びナクソスが支配しているキクラデス諸島の支配権を，ペルシア帝国の力を利用して手に入れようということであった。もちろんペルシア帝国には，版図を拡大できるチャンスだと嘘をついての所業であった。その企ての失敗の責任をペルシア帝国から問われるのは,当然の成り行きであった。そこでアリスタゴラスは,やられる前にやれとばかりに，ペルシアに反旗を翻したというのが，ヘロドトスの見立てである。

> かくてアリスタゴラスは，アルタプレネスとの約束を果たすことができなかったが，

> それとともに出征の費用を督促されて窮地に陥り，また遠征の失敗やメガパテスとの不和が不安の種となり，かくてはミレトスの支配権をも失うのではないかと考え始めた。そしてこれらのことどもを，あれこれ思い煩っている内に，とうとう謀反を企むようになったのである[51]。（ヘロドトス『歴史』巻5の35）

アリスタゴラスの「謀反」が謀反にとどまらないものを持っていたことを裏書きするのが，その後のアリスタゴラスの行動である。アリスタゴラスは，ミレトスの僭主ヒスティアイオスの代行であった。代行といっても僭主は僭主である。ペルシアに対する「謀反」を起こすにあたって，ミレトス市民を味方にするために僭主政を廃止し民主政にしただけでなく，他のイオニア諸国の僭主を逮捕し，本国に送り返すという策をとった。

> アリスタゴラスはまず，ミレトス人が進んで自分の謀反に加担してくれるように，本心は兎も角名目上は，ミレトスで独裁制を廃して万民同権の民主制を敷くこととしたが，続いてイオニアの他の地区にも同様の政策を実施しようとし，幾人かの独裁者を追放したり，また彼と共にナクソス遠征に参加した船団から捕らえてきた独裁者たちを，町々に恩を売るため，それぞれの出身地である町へ引き渡したりしたのだ[52]。（ヘロドトス『歴史』巻5の37）

そもそも「ギリシア人にとっては，ペルシア人という名を聞くだけでも恐怖の種となっていた[53]」というように，ペルシア帝国は圧倒的な大国であった。軍事大国なのである。だからこそ，普通ならばミレトスの僭主代行であったアリスタゴラスがペルシアに対する反乱を起こしたとしても，ヘロドトスが言うように単なるアリスタゴラスの個人的な理由だけであったとしたら，おそらくはイオニア諸国の大半は静観していたと思われる。絶対的に無理な戦いをわざわざやる必要はないからである。

アリスタゴラスは，船隊を北や南に出動させて，ヘレスポントスやカリア地方の多くの町をミレトスの同盟とすることに成功し，はるかなるキプロスも自発的にペルシアに反旗を翻した。反乱の火の手は見る間に，東地中海のギリシ

ア植民都市に広がっていったのである。なぜ反乱が燎原の火のように東地中海世界に広がっていったのかを解く一つの鍵が，ヘロドトスが書いている「ミレトスで独裁制を廃して万民同権の民主制を敷くこととしたが，続いてイオニアの他の地区にも同様の政策を実施しようとし，幾人かの独裁者を追放したり，また彼と共にナクソス遠征に参加した船団から捕らえてきた独裁者たちを，町々に恩を売るため，それぞれの出身地である町へ引き渡したりした[54]」という僭主政を廃止し民主政導入を後押しするような政策であろう。

ギリシア古代史の研究者中井義明氏によれば，イオニアの反乱が「各都市の僭主制の廃止をきっかけとして非常に広い範囲に反乱が拡大していったことから反乱には大衆的基盤[55]」があったのであり，個人的な利己主義が動機であったというヘロドトスの見解に対して，現代の研究者は否定的だそうである。

イオニアの反乱の原因について，自由を重んじるギリシア人たちは，ペルシアの支配に我慢できなかったという説明をされることもある。しかし，この反乱が，ペルシアの支配から数年後のことならばまだ了解できるが，反乱が勃発するまでにすでに半世紀近くの年月が経っている。それどころか，ペルシアの属国になるまえに，隣国リュディアに 14 年間も支配されていたのである。そのリュディアが，前 546 年に新興国ペルシアのキュロスによって滅ぼされた後は，ペルシア帝国の宗主権に服していたのである。

ペルシアの支配は決して過酷なものではなかった。ミレトスは，ペルシアの支配下でどちらかというと恩恵を受けていたと言った方がいいだろう。ヘロドトスによれば，ミレトスは「内争のために二世代にわたって疲弊の極に達し」ていたのであるが，ペルシアの支配下にあって「ミレトス史上最盛の時期に達しており，イオニアの華と謳われ[56]」るほどまでに発展し栄えていたのである。イオニアの反乱が燃え広がったのは，反ペルシアというよりは，僭主政の打倒にあったのではないか。ペルシアが僭主を傀儡として使っていたことから，僭主政の廃止がそのままペルシアへの反乱と結びついたのではないだろうか。

僭主政は，前 7 世紀から 6 世紀にギリシア各地のポリスに出現している普遍的な現象であった。トゥキュディデスによれば，「ギリシアが次第に強大にな

り，以前より遥かに多くの財貨を獲得するようになると，歳入も増大したので多くのポリスに僭主政（僭主制）が成立した[57]」のである。農業を主な生業とした時代から手工業と商業が盛んになり豊かになると，国家のなかでの不均衡の新しい原因が作り出され，それが，政治的混乱を助長する。重装歩兵として戦場に赴いていた農民戦士にとっても，貴族による政治的権利の独占は，耐え難いものとなっていた。政治的権利を求める民衆の要求が土地所有貴族階級によって拒絶されると，民衆は「暴力や策略で権力を掌握して貴族の抵抗を打ち砕いてくれる，エネルギッシュで遠慮会釈のない一人の男に全権を委任[58]」することになる。僭主とは，民衆の支持によって非合法的な手段に訴えて政権を獲得した者，もしくは，ある社会において慣習的に合法的と認められている枠をこえて自己の政治権力を行使した者のことである[59]。クロード・モセによれば，「僭主制はギリシア諸都市の歴史における重要な一契機として現われ，古い貴族社会の破壊に貢献し，古典期の「平等の権利（イソノミア）」の都市の出現を準備[60]」したのである。つまり，既得権益を頑迷固陋に守ろうとする貴族の牙城を突き崩す一つの手段が，僭主政であった。

イオニアの反乱は，アテナイのクレイステネスの改革が起きて10年足らず後のことである。小アジアのギリシア人植民都市の人びとにとっても，前508年のアテナイにおけるクレイステネスの改革で始まった民主政は，体制選択のもう一つの可能性となった。それも魅力的な体制選択となった。ペルシアがイオニア人に押し付けた，あるいは元々あった僭主政は，もはや時代遅れとなっていた。少なくともイオニアの植民都市の人々はそう感じていた。僭主政は人びとの支持を得られなくなっていたばかりか憎悪の対象にすらなっていた。つまり，僭主政に対する大衆的な反感こそがイオニア反乱の原因[61]ではないのかというのが，現代の研究者の見解のようである。この見解には筆者も同感である。政治の主体として成長してきていた民衆にとって，僭主政は，独裁であり，アジア的な専制と同一視されるようなものであったのであろう。

イオニアの反乱は短期間で終息したのではなかった。

イオニア諸国の敗北を決定的にしたのは，ミレトス沖のラデ海戦の敗北であ

り，その翌年の前 494 年にミレトスは陥落した。

> ペルシア軍は，右の海戦でイオニア軍を破るや，海陸両面からミレトスを包囲し，城壁を掘り崩し，またあらゆる攻城用の兵器を駆使して攻め立て，アリスタゴラスの反乱以来 6 年目にとうとう完全にミレトスを攻略した。ペルシア軍は全市民を奴隷にした[62]…。（ヘロドトス『歴史』巻 6 の 18）

反乱が起きて 6 年目にようやくミレトスは陥落するのである。想像以上に時間がかかっているというのが正直な感想である。まさか，イオニア諸国による反乱を終息させるのに,実際にはこれほどの年月がかかったとは思わなかった。ミレトスの街は徹底的に破壊され，そしてまたミレトスの人びとの運命も過酷なものであった。

> 大部分の男子は長髪貯えるペルシア人の手にかかって殺されるし，女子供は奴隷の境遇に落とされ，ディデュマの聖域は神殿も託宣所も掠奪と放火を蒙ったのである[63]。（ヘロドトス『歴史』巻 6 の 19）

その翌年にはキオス，レスボスという沿岸党島嶼も平定されて，7 年に及んだイオニア反乱に終止符が打たれた[64]。

註

（1） 周藤芳幸「ギリシア世界の形成」桜井万里子編著『ギリシア史』（山川出版社，2005 年），42 頁参照。

（2） マックス・ウェーバー『古代社会経済史』（上原専禄・増田四郎監修，渡辺金一・弓削達訳，東洋経済新報社，1963 年），182 頁。

（3） キトー『ギリシア人』（向坂寛訳，勁草書房，1984 年），89 頁

（4） アッシリア帝国滅亡後の四王国対立時代を迎えるが，その四王国を成立の古い順に紹介する。一番古いのがメディアである。紀元前 715 年頃にイラン高原に興った。次いで，興ったのが，小アジア，現在のトルコに紀元前 670 年頃成立したリュディア王国である。エジプト王国は，紀元前 663 年に復活した。最後

に成立したのが，紀元前626年頃成立の新バビロニアである。メソポタミア地方，現在のイラクを版図とした。

（５） 杉勇「四国対立時代」『岩波講座世界歴史　古代1』（岩波書店，1969年）283頁参照。

（６） ヘロドトス『歴史　上』（松平千秋訳，岩波文庫，1971年），26頁。

（７） 同上，13頁。

（８） J. M. ロバーツ『世界の歴史2　古代ギリシアとアジアの文明』（監修桜井万里子，月森左知訳，創元社，2003年）157頁参照。

（９） ヘロドトス『歴史　（上）』，前掲書，44頁。

（10） 同上，71頁。

（11） 同上，同頁。

（12） 同上，72頁。

（13） 同上，73頁。

（14） 同上，80頁。

（15） 馬場恵二『ペルシア戦争　自由のための戦い』（教育社，1982年），20頁参照。

（16） ヘロドトス『歴史　（中）』（松平千秋訳，岩波文庫，1972年），130頁。

（17） 馬場，前掲書，23頁参照。

（18） アリストテレス『アテナイ人の国制』（村川堅太郎訳，岩波文庫，1980年），43頁。

（19） Cf., Cf., Sarah B. Pomeroy, Stanley M. Burstein, Walter Donlan, Jennifer Tolbert Roberts, *Ancient Greece: A Political, Social, and Cultural History*, New York: Oxford University Press, 1999), p.175.

（20） ヘロドトス『歴史　中』，前掲書，159頁。

（21） アリストテレス『アテナイ人の国制』，前掲書，43頁。。

（22） ヘロドトス『歴史　中』，前掲書，160頁。

（23） 「穢れ人」というアルクメオン家に対するいいがかりについて，ヘロドトスは，次のように紹介している。「アテナイ人でオリュンピア競技に優勝した，キュロンという男があった。思い上がりの末に独裁を夢見て，同年輩の者たちと語らい，アクロポリスの占拠を企てたが，占領に失敗し（アテナの）神像にすがって命乞いをしようとした。当時アテナイの行政に当たっていた，地方行政区の長官たちは，これらの反乱者たちに生命だけは救けるという保証を与えて，避難所から退去させたのであったが，結局この者たちは処刑されて，アルクメオン家の一族がその責任を問われることになったのである。」（ヘロドトス『歴史　中』巻5の71，160-161頁。）

（24） ヘロドトス『歴史　中』，前掲書，161頁参照。

(25)　Cf., N.G.L. Hammond, *The Classical Age of Greece*, London: Phoenix Giant,1975, p.59. 評議会を，ハモンドはアレイオス・パゴス会議だとしている。その評議会を解散させ，イサゴラスと 300 人の支持者での寡頭政権を樹立させ，アテナイをスパルタの衛星国にしようとする，スパルタ王の企みに対して，アテナイの民衆が暴動を起こすことで反旗を翻したのである。

(26)　ヘロドトス，松平千秋訳『歴史　中』，前掲書，161 頁。

(27)　アリストテレス『アテナイ人の国制』，前掲書，43 頁。

(28)　ブルクハルト『ギリシア文化史　1』（新井精一訳，ちくま文庫（筑摩書房），1998 年），153 頁。

(29)　澤田典子『アテネ民主政　命をかけた八人の政治家』（講談社，2010 年），15 頁参照。

(30)　前沢伸行「ポリスとはなにか」弓削達編『地中海世界』（有斐閣新書, 1979 年），39 頁参照。

(31)　同上，36 頁参照。

(32)　マックス・ウェーバー『古代社会経済史』，前掲書，226 頁。

(33)　前掲書，同頁。

(34)　ピエール•ブリュレ『都市国家アテネ　ペリクレスと繁栄の時代』（青柳正規監，創元社，1997 年），58 頁。

(35)　Cf., *Hills of Philopappos-Pnyx-Nymphs*（Publication of the Association of Friends of the Acroplis,2004）, p.19.

(36)　ヘロドトス『歴史　中』，前掲書，165 頁。一部改訳。

(37)　M・I・フィンリー『民主主義　古代と現代』（柴田平三郎訳，講談社学術文庫，2007 年），40 頁参照。

(38)　ヘロドトス『歴史　中』，前掲書，131 頁。

(39)　同上，132 頁。

(40)　同上，同頁。

(41)　同上，130 頁。

(42)　同上，133 頁

(43)　同上，132 頁。

(44)　同上，同頁。

(45)　同上，133 頁。

(46)　同上，136 頁。

(47)　同上，134 頁。

（48） 同上，135 頁。
（49） 同上，136 頁。
（50） 同上，同頁。
（51） 同上，同頁
（52） 同上，138 頁。
（53） 同上，306 頁。
（54） 同上，138 頁。
（55） 中井義明『古代ギリシア史における帝国と都市ーペルシア・アテナイ・スパルター』（ミネルヴァ書房，2004 年），52 頁。
（56） ヘロドトス『歴史　中』，前掲書，130 頁。
（57） トゥキュディデス，『歴史 1』（藤縄謙三訳，京都大学学術出版会，2000 年）第 1 巻 11，16 頁
（58） フランソワ・シャムー『ギリシア文明』（桐村泰次訳，論創社，2010 年）シャムー，82 頁。
（59） 岩田拓郎「アテナイとスパルタの国制」『岩波講座　世界歴史 1　古代 1　古代オリエント世界　地中海世界 I 』（岩波書店，1969 年），531 頁。
（60） クロード・モセ『ギリシアの政治思想』（福島保夫訳，白水社，1972 年），14 頁。
（61） 中井義明，前掲書，44 頁
（62） ヘロドトス『歴史　中』，前掲書，208 頁。
（63） 同上，同頁。
（64） 馬場恵二，前掲書，61 頁。